

夏目漱石

客観描写と印象描写



# 客観描写と印象描写



これは近ごろの小説家のよく用いたがる言葉であるか  
ことば  
らむろん小説の描写すなわち書き方に関する術語に違  
ちがい  
ないが、むやみに用いる割合に使用方がすこぶる茫漠と  
ぼうぼく  
しているので、了解に苦しめられるものがだいたい多い。  
中には客観描写と印象描写を両刀のごとく心得て同時に  
振り回すことができるように説いているものもあるよう  
だが、これはあたかも金貨本位と銀貨本位を同時に採用  
すると一般で、はなはだしき乱暴である。わが文芸欄の

読者の多数はとうから気が付ついているだろうとは思  
うが、世間には批評家の好い加減かげんな出鱈目でたらめ術語に迷わされ  
て困るものも少すくなくなさそうだからちよつと弁じたい。

元来純客観な描写と称するものは厳密に言うと小説の  
うえで行われべきはずのものではないが、それはとにか  
く俗に客観的な事柄ことがらを言うのは、我々の頭の中に映る現  
象のうちで、甲にも乙にも丙にも共通の点だけを引き抽ぬ  
いて、便宜名づけた約束にすぎない。言い直すと、主観  
のうちの一般に共通な部分がすなわち客観なのである。  
自分の頭の中に花が赤く映る事実はもちろん主観であ

る。(自分の頭の中に起る現象で他人の頭の中に起る現象ではないから)、けれどもこの赤という事実について、十人が十人、百人が百人ことごとく一致した時には、甲なる自分と乙なる他人を離れて、赤い花が独立して存在するものと見做みなすことができる。すなわち漱石の頭に映る花は赤いと断ことわる必要がなくなつて、ただ花が赤いと言えは済むから、それを客観の価値が生じたと称するのである。ところが印象描写印象描写としきりに振回されている印象という字は、まったく反対の性質を帯びたものである。印象とあるからには必ず誰だれの印象と付加しな

くては意味が完全しない言葉である。もと印象という語はイムプレツションの訳であつて、印象と二字並べて使う以上は、何人なんびともこの裏面に原語のイムプレツションを繰返くりかえさないものはないくらいに明瞭めいりような訳字である。試みに西洋人のこの字を使う場合を調べてみるが好い。必ず私のイムプレツションとか、あのひとのイムプレツションとか、ある格段な人の特別に所有した印象と断つてないことはない（ない場合は印象と他の同種類の言葉、たとえば感覚とか情操とかに對立させた時に限る。ちようどだれの父と言わねば父という言葉の意味は完全しな



いけれども子に対したり伯父おじに対したりして用いる時は単に父と言ひ放しにするようなものである。）

すでに甲の印象と断らなくつても通用しない字ならば、甲の印象であつて、必ずしも乙の印象じゃないと限定したと同然である。したがって印象的事実というものは十人が十人、百人が百人に共通であるとはかぎらない。いな十人十色というくらいに違ふべき筋のものである。自分の頭に映る花が赤いとまでは誰も一致するが、この赤い花から受ける心持はめいめい違つているかもしれないからである。

だから客観描写の徳は一般に通ずる点にあつて、印象描写の趣は作家の特有な点に存するのである。むろん一編の小説を作るうちに両描写を兼用することはできるが、主張としてこれを併立へいりつさせることは性質上不可能である。一行の描写を見て、これが客観描写でかつ印象描写だなどというのはあたかもこれが君主独裁で同時に民衆同決だと騒ぐようなもので、頭のある人の口にするをはばか憚るべき言い分である。

そのうえ厳密に論ずると、前にも言ったとおり、純客観の叙述なるものは科学以外にはほとんどありうべから

ざることである。もし客観描写を主張して極端まで行く  
とすると、彼は頭を下げたとは言えるが、彼は感謝した  
とは書けないわけになる。感謝のつもりで頭を下げたの  
だか、人を茶化すつもりで頭を下げたかは、向うの心理  
状態をこちらで好い加減に想像したにすぎないからであ  
る。だれが見ても頭を下げさえすれば感謝の精神が現あらわ  
れたんだと断定するほど、吾人ごじんはこの客観的現象の裏面  
に固定した心理状態を付着ひるめししていかない。それはドンが鳴  
っても必ずしも午飯ひるめしだと極きめないようなものである。こ  
れと同じくただ笑ったとは書けるが苦く笑わらしたとか冷ひや笑わらし

たとかは決して書いてならんことになる。苦笑とか冷笑とか言うやいなや先方の心理を揣摩しますることになつてなれば客観の現象を離れるからである。

小説の批評や議論が盛さかんになるのは文芸界に住する一人として余のもつとも喜ぶところである。けれども自分の使用する用語の意味をもよく考えずに、むやみに頭の確たしかでない青年を吹きに掛るのは、はたから見ていても青年に気の毒である。一般の読者にはあまり狭すぎる題目とは思つたが、以上の理由で数言を費ついやした。

(明治四三・二・一)





日本文学電子図書館

---

## 客観描写と印象描写

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第7巻」角川書店  
昭和42年 6月30日 6版発行

---

日本文学電子図書館